

“はたらく”を考えるワークショップ
ループリックの使い方ガイドブック

小学生版

瀬戸SOLAN学園初等部 副校長 三宅貴久子 監修
明治大学 荒木淳子・創価大学 高橋薫 編著

2024年10月
パーソルホールディングス株式会社

1. ルーブリックとは何か？

- 教員と子どもとが授業の到達目標を共有し、学習目標を明確にするためのツールがルーブリックです。
- 目標が明確になることで、指導・支援と評価は一体化されます。

教員が授業を一方向的にするのではなく、子ども自らが学習を進めていけるように支援するのが教員です。「この授業では何を学ぶのか」という到達目標を教員と子どもとの対話を通して明確にします。つまり、教員が、授業での到達目標を子ども自身が意識化できる状態をつくるということです。その具体的な方法がルーブリック作成なのです。

例えば、あるめあてに対してS,A,B,Cの4段階のレベルのルーブリックを作るとします。授業では、子ども達全員がAを目指せるようにしていきます。

めあてが達成できていたらA、さらにレベルを上げて達成することができたらSです。

反対に、学習の方向性は合っていても何かが抜け落ちているような学びの状態の場合はBそもそも学習の方向性が違っているという状態はCということです。

図1 ルーブリックの考え方 (瀬戸SOLAN学園の活用例:三宅作成)

S	A	B	C
十分満足	満足	やや努力不足	かなり努力を要する

Aに何らかの価値づけ

例:【具体性】自分の実体験をもとにその授業の内容を捉えている

概ね期待した方向での学習は進んでいるが、どこかで見落とされている部分がある

学習の方向性そのものに改善が必要

監修者アドバイス

ルーブリックは評価に使われることも多いですが、教員と子どもが共同でルーブリックを作成する実践も実施されています。

三宅貴久子先生



瀬戸SOLAN学園
初等部 副校長

教員が提示するめあては、抽象的な表現が多いです。

たとえば「みんなの話をよく聞く」という目当てを提示した場合、「みんな」とは誰なのか、「よく聞く」とは何ができればよく聞くことになるのか、について、教員は授業をデザインしている当事者ですから、よく理解できていますが、子どもは違う見方・考え方をしている可能性があります。

教員と子ども達とで一緒にできるだけ具体的にしていくことが大切です。教員と子ども達がルーブリックを学びの目標を共有するためのツールとして使うには、ルーブリックの内容を子どもが理解できる具体的な内容に落とし込むことが必要です。ルーブリックを設定するプロセスを通して、子どもたちは何を学ばなければいけないかが明確になり、到達基準を達成するために自分はどうすればよいかを考えます。

そして、授業の振り返りの場面では、ルーブリックに照らして自分の学びを自分で評価することができるのです。

2. 実践例

監修者による実践例

三宅貴久子先生



瀬戸 SOLAN 学園
初等部 副校長

パーソルホールディングスのルーブリックを子どもにそのまま見せるのではなく、その中であらかじめ教員が一部を取り出し、「めあて」として子どもにわかるような言葉にします。

そして、授業の冒頭、子どもにそのめあてを見せて、一緒にルーブリックを完成させます。

パーソルホールディングスのルーブリックに記載されている目標の一例



社会人の方々にインタビューをして、収集した情報をまとめ、「働く」とは何かについて収集した情報をもとに自分の考えをまとめる。

目標	実践・働き	S	A	B	C
<p>○社会人の方々にインタビューをして、収集した情報をまとめ、「働く」とは何かについて収集した情報をもとに自分の考えをまとめる。</p> <p>○目的や目標に応じて事例が明確に出るよう記録の構成を工夫しながら行うことができる。(人間関係形成・社会関係形成能力)</p> <p>○話し手の意図を考慮しながら聞き、自分の意見と比較しながら考え、働くことに対する自分の考えをまとめる。(人間関係形成・社会関係形成能力)</p> <p>○考えたことや伝えたいことなどから話題を決め、収集した知識や情報を関係付けすることができる。(キャリア・プランニング能力)</p>		話し手の意図を考えた後、自分の意見と比較しながら考え、働くことに対する自分の考えをまとめることができる。	話し手の意図を考えた後、自分の意見と比較しながら考え、働くことに対する自分の考えをまとめることができる。	複数の意見を聞き、働くことに対する自分の考えをまとめることができる。	自分たちの考えがまとめられる。

「授業のめあて」として、子どもにもわかるような言葉に言い換える



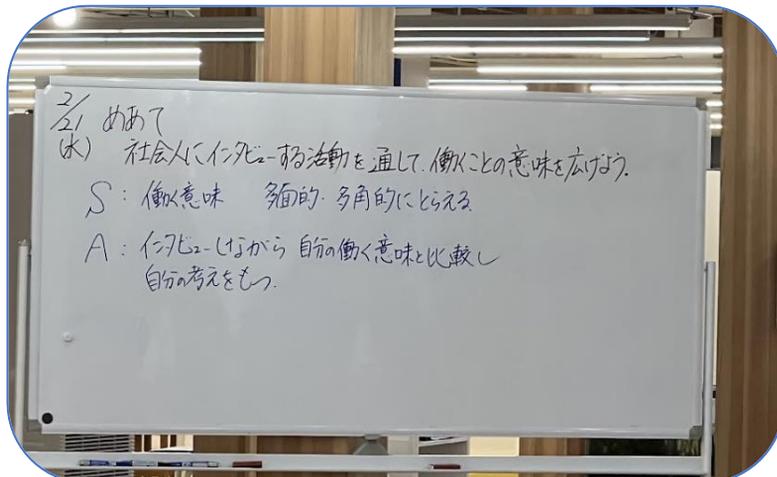
社会人にインタビューする活動を通して、働くことの意味を広げよう。

S : 働く意味を多面的・多角的にとらえる。

A : インタビューしながら自分の働く意味と比較し、自分の考えを持つ。

写真

瀬戸 SOLAN 学園初等部5年生にワークショップを行った時のめあて(2024年2月実施)



3. 実際にルーブリックを使ってみよう

ルーブリックは授業の冒頭と最後に使うだけでなく、授業全体を通して、教員も子ども達もルーブリックを共有し常に意識していくことが大切です。
具体的には次のような活動を行うと良いでしょう。

(1) 授業前の準備

パーソルホールディングスが用意したルーブリックの抽象的な表現を、子どもの活動目標に合わせて、わかりやすい表現に置き換えます。たとえば「説明する」という表現は、何ができれば「説明した」と言えるのかを子どもの活動目標に合わせて教員が具体的に考えておきましょう。

「1. ルーブリックとは何か？」で説明したように、教員自身がワークショップを普段の授業に結びつけ、パーソルホールディングスが準備したルーブリックの言葉を子どもにわかるようなやる気の高まる言葉に置き換えて「めあて」として説明しましょう。

(2) パソルのワークショップの冒頭



授業は冒頭が勝負です

前の時間の振り返りやこれから行うワークショップで何を達成するのかというめあてを子どもと共有します。

めあてを子どもに提示し、何ができたから「A基準」になるのかを子どもと一緒に作ります。

めあてをさらに具体的に子どもの活動に落とし込み、ルーブリックを作ります。

その上でもっと何ができたらSなのかを子どもと話し合い共有します。

BとCは特に板書しなくてもかまいません。
▶ 全員がA基準を目指すことを強く意識させるため



監修者アドバイス

ワークショップの冒頭は教員も加わり、子どもと一緒に今日のめあてを確認しましょう。ルーブリックをそのまま説明するのではなく、子どもにわかる、やる気が高まるような言葉と一緒に作っていきましょう。

たとえば、前述したように「良く聞く」の「聞く」とは何ができれば「聞く」なのでしょう？お友達の話を自分と比較しながら聞けたら良いと判断するのか、それとも質問することができたら「良く聞く」なのか、この授業の中では何を「良く聞く」と定義するのか。それを具体的な行動に落とし込んで子どもと共有しましょう。

(3) 授業中 ▶ 教員もワークショップに加わろう



教員もワークショップに加わってみましょう。また、ルーブリックは、授業中も子どもが見えるように、ホワイトボードなどに書いておくとういでしょう。

教員は、ワークショップ中の子どもの様子を見て、活動が止まっていたり、子どもの活動がルーブリックのめあてから逸れたりしているようなら、介入または見守るなど判断し、子ども全員がルーブリックの「A」を達成できるよう支援しましょう。

(4) 授業の最後 ▶ ルーブリックを使って学びを振り返ろう



授業の最後は、子どもにルーブリックに沿って授業での学びを振り返ってもらいましょう。



教員もまた、ルーブリックに沿って子どもの学びを評価します。



子どもの振り返りにはできるだけ教員がコメントを返してあげると良いです。

4. おわりに



外部専門家によるワークショップへの教員の関わり方

- 授業のデザイナーは教員自身です。



ワークショップではパーソルホールディングスから派遣された複数の社会人が講師となります。とはいえ、授業のデザイナーは教員自身です。外部専門家はあくまでもゲストに過ぎません。今回のワークショップを普段の授業とどのようにつなげ、子どもに何を学び取ってもらうのかを決めるのは教員自身です。



授業資料は外部専門家が作成しますが、できるだけ教員も事前に資料に目を通し、内容を子どもの実態と照らし合わせて吟味することによって、子どもにとってより意味のある学びにつながります。



ルーブリック監修者

瀬戸SOLAN学園初等部 副校長 三宅貴久子先生より

授業をデザインするとは、子どもが主体的・創造的に学ぶためにどのような場を用意したら良いか、つまり学習環境をデザインすることです。授業を通して子どもにどのような力をつけるのかを明確にし、それを達成するための学習環境を考えます。

それは、どのような「活動」「道具」「場所」で、どのような「人」との出会いを準備したらよいのかをデザインすることです。

たとえば、外部専門家からは、インターネットや本などの文字情報だけでは得られないリアルな情報が得られます。

外部専門家に来てもらうとしても、どういう人に来てもらって、どういう場所でどういう活動をしてもらうのかは、あくまでも授業のねらいを達成するための手段であり、教員の授業構想が重要です。